

～地域の「お宝」を次世代につなぐ～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 持続的な地域づくりにおける「地域資源」の活用と住民の地域意識の形成過程
研究代表者 : 総合政策学部 准教授 山田佳奈
課題提案者 : 水分まちづくりの会
研究メンバー : 平塚明(総合政策学部)
キーワード : 地域づくり、一日博物館、「お宝」

▼研究の概要(背景・目標)

【背景】岩手県紫波町水分地区においては、同町の事業を契機として平成24年に「水分まちづくりの会」が発足した。同会は夏祭りの復活や地域の「お宝」の発掘、昭和20年代の新聞記事を復刻した冊子や地域の郷土食をまとめた冊子の発行など、種々の実績を重ねてきた。

さらに、より恒常的な地区の交流の機会を目指し、同会は地域全体を「博物館」とする構想を立案した。この構想では、地域の歴史や伝統文化、潜在する「宝」を住民自身の手で掘り起こしながら次世代に継承し、またその活動の過程で地域の繋がりを深めていくことが目指された。「水分博物館設立実行委員会」も組織され、5テーマ(観光・食文化・歴史・イベント・自然)のチームが活動を進めた。

【研究のねらい】長期的な視野のもと、一連の活動を通じた主体的・持続的な地域づくりの諸条件を探求することをねらいとした。特に、地域の活動プロセスを跡付けることにより、地域の自己認識をより深め、住民による自主的な活動が長期にわたって自己展開していくための諸条件の示唆を得ることが期待される。

▼研究の内容(方法・経過)

【今年度の主な研究内容】①水分地区の環境・景観および食・食文化を中心とする生活史に関する基礎調査、②「水分まちづくりの会」の活動過程と住民の地域意識の把握

【方法】①博物館準備の会合等への参加(参与観察)、②博物館運営に関わる先行事例および水分地区の歴史・自然・食文化に関する基礎調査・聞き取り、③博物館当日の運営への一部参加(学部学生と本研究メンバー2名)

【経過】地区住民への呼びかけにより集まったお宝(約120点)を「お宝ガイドブック」にすべて掲載(コラムを研究メンバー2名が担当)し、「お宝マップ」の作製をイラストレータの方に依頼して作成し、この両方を水分地区の全戸および来場者や協力者・機関等に配布【写真1】。



【写真1】お宝ガイドブックとお宝マップ

◆「みずわけ湧くわく博物館」の開館(平成28年6月19日)

◎メイン会場「水分公民館」:主に①「お宝」46点の展示、②田舎スイーツの体験・試食、③宮手鹿踊りの上演・水分小学校の鼓笛隊演奏、④水分の歴史に関する紙芝居・同会「歴史チーム」による発表

◎サブ会場「武田家住宅」(紫波町指定文化財):武田家および「武田家を守る会」メンバーを中心に準備。来場者は水分地区の古地図の見学や田舎スイーツ・日本庭園の体験。



【写真2】ツアー時の様子(サブ会場の馬屋内部)

◎バスツアー:午前・午後約2時間半ずつ実施。お宝の歴史ポイント(蜂神社・陣ヶ岡・武田家住宅・志和稲荷神社)をめぐる、紫波町の観光ボランティアと各ポイントでの説明者により解説【写真2】。



【写真3】お宝展示の様子(博物館当日のメイン会場)



【写真4】サブ会場の馬屋入り口(当日)

▼研究の成果(結論・考察)

この博物館は「一回限り」のイベントではなく、継続的な実施が当初より想定されている。そのため、特に今回の博物館の特徴として現時点で考えられる点を、数点のみ指摘する。

(1)開館準備や実際の開催という一連の過程を通して、「地域」(ローカル)と「個人」や「自分の家」(パーソナル)の「記憶」が再認識され、かつ再構成される場が醸成しつつあると考えられる。

【例:地区の昔の祭りのビデオ上映】
地域や自分の家族・親族の「記憶」の呼び起こし

→その場に集まった人々との共振
→世代を超えた会話



【写真5】ビデオ上映(当日)

⇒「地区の記憶」の「次世代への継承」へ

(2)「お宝」がもつ具体的な「物語」は、個々の住民が何をお宝と考えるかという「主観的意味」と密接に結び付く。住民自身のお宝の選択という過程は、この博物館の持つ個性の一つとなろう。

他方、「地区外」からの参加者は、博物館への訪問者として見学する一方、「では自分の地域や家ではどうか」という自分の地域への振り返りが促される契機となりうる(参加者の声より)。

(3)博物館の運営:同会にとって、各家から集められたお宝の整理や管理は初めての試みであった。しかし、それらの取り組みと同時に多様なイベントも行うという複雑な運営が可能になったのは、活動の積み重ねによる会の機動力と地域の「信頼関係」による結果ではないか。この点も、持続的な地域づくりのポイントの一つと考えられる。

▼おわりに(まとめ・今後の展開)

【今後の展開・方向性として】他事例を参照しながら考察と分析を進める一方で、今回のお宝を手掛かりとした、調査の深化が考えられる(例:地区の住民自身による探求/各領域の専門家が随時加わりながら複合的な視点で行う探求、など)。

⇒各々の立場から地域の「お宝」の掘り起こしと探求を行うなかで、内外の相互作用が、「地域に対する認識の深化・再構成」と「地域への愛着形成の促進」に寄与することが期待される。

【謝辞】水分地区の皆様や聞き取り・アンケートにご協力いただいた皆様、資料収集にあたりご協力いただいた羽咋市立図書館の皆様にご感謝申し上げます。

【参考文献】

・塚原正彦、2016、『みんなのミュージアム 博物館・図書館未来学』、日本地域社会研究所
・羽咋市チャンピオン協会、1986、『羽咋ギネスブック』Vol.1